

テーマ:KINGCA WEEK 2024 に参加して(参加感想記)

大阪市立総合医療センター 消化器外科 櫻井克宣

この度、日本胃癌学会から韓国胃癌学会 KINGCA2024 の参加において、参加助成を給付していただき、大変ありがとうございました。KINGCA2024 は9月26日から28日の3日間、ソウルのロッテホテルで開催されました。9月のソウルは気温が25度前後で、気温湿度ともに日本より低く、空港の外に出た時は、ひと足早い秋を感じました。私は2014年に韓国延世(Yonsei)大学のセベランス病院に international fellow として、Professor Woo Jin Hyung 先生のもとでロボットを含む低侵襲手術を学んだ経験があります。韓国胃癌学会 KINGCA はこの時から知っていましたが、参加したのは2022年が初めてで、今回は3回目の参加になります。ここからは KINGCA の雰囲気と私の感じたことを中心に述べたいと思います。

発表会場はホテル2階で、横並びに Room A から Room D までの4つの口演会場があり、3階はポスター会場でした。会長講演などの時は、Room A から D の仕切りの壁が手際良く取り外されて1つの大会場になります。また、ポスター会場に行くと、全てのポスターボード上部にカラーで KINGCA2024 のロゴが付いていて、とても見栄えがいいです。ポスター掲示も両面シールで簡単に貼り付けができます。加えて、KINGCA では口演およびポスター発表の演者に対し、副賞を含む Award が準備されており、演者のモチベーションになるように工夫されていました。学会のホスピタリティが感じられました。

また、日本国内の学会とは違い、発表会場内にも大きな企業広告が見られ、国際学会らしい華やかさが感じられました。規模は日本の胃癌学会と比べるとコンパクトではありますが、参加者の我々にとっては、会場間の移動にかかる時間がなく、日本と韓国の胃癌治療をリードする両演者の発表を効率よく、落ち着いて拝聴することができます。特に、私が注目したのは中国からの脾温存の No.10 郭清手技とその成績の発表と、噴門側切除後の再建方法ごとの短期成績と QOL の発表でした。非常に多くの患者数で検討されていて、説得力があり、大変勉強になりました。

私はフレイルをテーマにポスター発表をしました。私以外の演者は韓国、インド、インドネシア、ロシア、トルコと多国籍で、日本人は私だけでした。発表内容もそれぞれ多様性に富んでいて、いずれのテーマも新鮮に感じました。私は Asan medical hospital の演者の次に発表することになっていましたが、発表が始まるまでの間、お互いのキャリアや発表内容についてフレンドリーに話をすることができました。相変わらず不慣れた英語での発表とディスカッションに緊張しましたが、なんとか無事に終えることができました。そして、進行役の先生からは reviewer の視点で結論の書き方について改善点を指摘していただき、大変参考になりました。

私の session では、韓国からは2つの演題の発表がありました。Asan medical center からは2000例以上の胃切除 B-I 再建症例における text book outcome について、Seoul national

university からは 7000 例以上の胃切除の内の mortality 症例の検討でした。韓国のハイボリューム病院の症例数の多さには、いつも驚かされます。我が国の胃癌手術は全国的に減少していますが、日本からも知恵を絞って新たな知見を国外に発信する必要があると感じました。

最後に、KINGCA にマスタークラスで参加していた大阪赤十字病院の先生とセベランス病院で偶然一緒になり、韓国料理を一緒に楽しみました。思いがけない出会いがあるのも国際学会の良いところだと思います。円安が進む中、国際学会の参加は経済的な負担も大きくなりますが、学会からの助成金は大変助かります。日本胃癌学会理事長の掛地先生、国際委員会委員長・理事の竹内先生には、この場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



発表前にポスターの前で写真



学会会場



セベランス病院の Hyoung Il Kim 先生と写真